

平成27年度（第37回）

少年の主張 石川県大会

発表記録集

伝えよう！21世紀を生きる君たちの熱いメッセージを



と き ■ 平成27年9月26日(土)

ところ ■ 石川県青少年総合研修センター

石川県 石川県教育委員会 石川県健民運動推進本部

はじめに

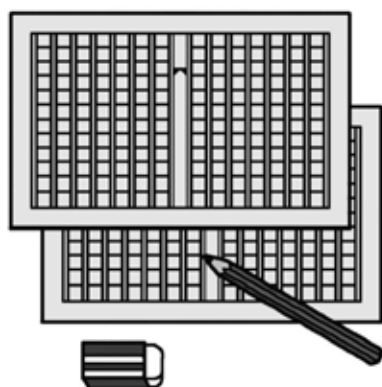
昭和五十四年国際児童年を記念してはじめられた少年の主張石川県大会も、たくさんの方々を支えられ、今年で三十七回目を迎えることができました。

この大会は、中学生が、日常生活の中での体験や考えを自身と言葉でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、中学生世代の社会参加意識の醸成を図るとともに、多くの大人に現代の中学生への理解を深めてもらうことを目的として開催しております。

本大会は、加賀地区、石川中央地区、金沢市地区、能登地区の四地区から選ばれた十六名の中学生が、それぞれの体験から真剣に考えたことを力強く発表し、聴衆に大きな感動を与えました。

この記録集は、その十六名の主張を取りまとめたものです。一人でも多くの方々に読んでいただき、中学生が日ごろどのように考え生きようとしているのかをご理解いただき、今後の子ども・若者活動推進の一助としてご活用いただければ幸いです。終わりに、地区大会をはじめ、この大会のためにご尽力いただきました多数の皆様には厚くお礼を申し上げます。

石川県健民運動推進本部



も く じ

◎はじめに

◎大会発表作品

最優秀賞

努力のレンガ

中能登町立中能登中学校 三年 山田 萌恵……………3

優秀賞

がんばらなくていい

白山市立笠間中学校 三年 上田 裕衣……………4

小さな挑戦

石川県立金沢錦丘中学校 三年 米澤 春風……………5

奨励賞

発展途上国と共に

金沢市立泉中学校 三年 八尾 佳凜……………6

繋 ぐ

七尾市立御祓中学校 三年 山本日菜子……………7

看護師をめざして〜今できることを大切に〜

金沢市立北鳴中学校 三年 石橋 紗希……………8

自分づくり

七尾市立朝日中学校 三年 高田 沙雪……………9

今を大切に

かほく市立宇ノ気中学校 三年 宮谷 翠……………10

「生きていられる」ということ

能美市立根上中学校 三年 野口 陽菜……………11

備えあれば憂いなし

輪島市立門前中学校 三年 小川 泰平……………12

一人ぼっちの人なんていない

野々市市立布水中学校 三年 押田 優希……………13

人とのつながり、あたたかさ

加賀市立東和中学校 三年 北市佳於里……………14

心の支援

かほく市立高松中学校 三年 中村日奈子……………15

友だちの力

加賀市立錦城中学校 三年 新井 千紘……………16

走るために

金沢市立清泉中学校 三年 日吉 美智……………17

未来へつなげる!!加賀丸いも!!

能美市立根上中学校 二年 越田 瑞生……………18

(優秀賞、奨励賞は発表順に掲載)

◎審査員講評……………19

石川県教育委員会事務局学校指導課 担当課長 才鷹 一博

◎少年の主張石川県大会概要……………20

◎石川県大会審査基準……………21

◎地区大会概要……………22

◎平成27年度少年の主張全国大会

「わたしの主張2015」 内閣総理大臣賞受賞作品……………26



「継続は力なり。」この言葉は私の座右の銘です。小学校の頃の私は宿題の他に予習や復習をしていました。努力することは素晴らしいことだと信じていたのです。

中学校に入学してからもその姿勢は同じでした。できる限りの準備をして、何事にもものぞむよう心掛けてきました。

そんなある日の休み時間のことです。友人との話題は次のテストのことでした。すると友人がこんなことを言ったのです。

「萌恵はいいよねー。頭良いから勉強しなくても良い点が取れてさ。」返す言葉が見つかりませんでした。私だって何もしないで良い点が取れる訳ではありません。自分なりの努力をずっと続けてきたのです。友人の一言で私の努力は周りの人には見えないのだと気付きました。そのことがショックでした。

部活動ではバスケット部のキャプテンをしていました。部の雰囲気を感じ上げるために声を積極的に出し、みんなを引っ張るように素早く行動してきました。

でも、それとは裏腹に部の雰囲気は悪くなっていくばかりか、大きな声を出すと、「真面目だね。」と冷やかされます。そのたびに泣きたい気持ちになりました。

そんな事が続き、努力することに対する喜びや達成感をだんだん感じることができなくなりました。努力して結果が良かったとしても、誰も見えない私の努力には気がついてくれないし、みんなの前で頑張る姿を見せると冷やかされます。冷やかされて嫌な思いをするくらいなら努力しないほうが楽に決まっています。

私は努力することをサボり始めました。

数日後。自分の部屋を掃除していると、少し前の学校だよりを見つけてきました。私が見つけた学校だよりには校長先生から私たちへのこんなメッセージが書かれていました。

「人生はレンガを積み上げていくようなものだ。一日一つずつレンガを積んでいく。一度置いたレンガはもう二度と動かさない。頑張っ

て積んだレンガはきれいなままで、怠けて雑に積んだレンガは雑なまま残っていく。積み上げられたレンガは、あなた自身。さてあなたのレンガは？」

そのメッセージの最後の一文が鋭い矢のように私の心に深く刺さりました。私は今、努力を怠けてしまっている。雑なままレンガが残ったらどうしよう。

私はその不安を、父に話しました。すると父は

「おまえが人一倍努力していることは、お父さんは知っているよ。だから、みんなに見えなくても努力を続けたら良いと思うよ。」と言ってくれました。そのひとりで、私の迷いはすーっと消えていきました。

周りには見えなくても、冷やかされても、小さな努力の結晶が今の私です。これからも努力することに誇りを持ち、丁寧に真っ直ぐレンガを積み上げていきたいです。この先の未来、努力のレンガを積んできたこと、自信を持って言える自分になりたいです。





「かまわん。この家なんてどうなってもかまわん。」
そう、ひいばあちゃんが発した一言は、あまりに重く、胸を強くしめつけた。

平成二十六年二月、いつものように部活も終わり、車で迎えに来てもらった私はドアを開け、「ただいま。」

そう言った。しかし、母の「おかえり」という言葉が無い。そのかわり母が言ったのは、「ひいばあちゃんが倒れたんだって。デイサービスの人が見つけてくれたみたいで。脳こうそくだったって。」
そういわれた私の脳裏に「死」という文字が浮かんだ。

何日か後、ようやく面会することができた。元気に「久しぶり。」って言おうとした私は言葉をのみこんだ。そこには、薬の副作用で顔がパンパンにはれ、今まであった元気がまるでウソだったみたいな様子だった。

ひいばあちゃんは脳こうそくで手や足、口までが動かない状態だったが、私を見てニコツと笑った。その笑顔に私は、気づかないうちに予防のためにつけていたマスクを涙でびしょびしょにぬらしていた。それからひいばあちゃんは元気をとりもどしはじめ、回復していった。そう見えた。

だが、ひいばあちゃんと私たち家族の本当の絆をつなぐ糸に危険信号が発せられていた。

回復後、認知症の症状が出はじめ、私自身の名前をまちがえることからはじまり、どんどん進行しているように見えた。周りの家族から、笑顔も失われていった。

家族との言い合いも増え、ある日、「私が一番えらいんじゃない。私の言う事だけしとりゃいいんや。できんのならでてけ。」それだけでは終わらず、「かまわん。この家なんてどうなってもかまわん。」

この言葉が何よりも私を傷つけた。その時は、(一番長くこの家ですごしてきたのにどうでもいいってどうして) って思いでいっぱいになり、わけが分からなかった。

その頃の私は、認知症についてよく知らず、私たち家族がひいばあちゃんに傷つけられていると思ひ込んでいた。
認知症について調べてみると、そこには不安に思う気持ちから起こ

るケースが多いと書いてあった。何か話しかけても、「忙しいから」や「今は無理」といった言葉を言われ、聞いてもらえなかったりすると、邪魔者にされたとか、のけものにされていると思うそうだ。ひいばあちゃんがどうでもいいと言ったあの日も、自分がいない所で悪口を言っているとケンカになったことが初まりだった。あの一言も、私たちが、ひいばあちゃんを不安にさせてしまったからではないかと後悔した。

認知症になった人が悪いのではない。その人に関わっている人たちが、認知症になった人を不安にさせないことが大切なのだと思いつかされた。
不安にさせないためには、まず、話を聴く機会を増やし、何か不安に思っていることはないか聞くことと、そのことに共感することだ。私たちは、共感することができずに、間違っていることを直すことにこだわり、ひいばあちゃんにとっても、私たちにとっても、苦しい悪循環を生んでいた。家族それぞれが、間違った方向にがんばってしまつたために。

私たちのような経験をしている人は多くいると思う。「こんなにかんばっているのに、何で？」と思うこともあるだろう。

私は今、そんなみなさんに伝えたい。がんばらなくていい。間違つた方向にがんばり続けても、ストレスがたまっていくだけで。だから、がんばらずに、時間がある時に、話を聴いて、共感する。これをおんばらなきやできないという人は、顔を合せた時、「おはよう」などと、一言を交わすだけでいい。それだけで何かは変えていける。

私たち家族は今、話を聞いたり、共感することを心がけている。それでも完璧に直るわけではないけれど、今の私たちの家庭では、だんだん笑顔が増えてきている。

そして、私たちのように悩み、もがいている人たちにも、笑顔の花が咲くことを心から願っている。もう一度声を大にしてみなさんに伝えたい。がんばらなくていいのだ。





「何事にも挑戦しなさい。」

とよく言われます。今の私はその言葉にうなづくことができません。けれど、以前の私は、挑戦することがこわくて仕方ありませんでした。

私は小学生の時、何か係りを決めるたびに

「春風でいいんじゃない。」

と友達から言われ、リーダーを引き受けることが多くありました。自分もそのことに満足し、思った通りに行動していました。しかし、人に求めることも多かった私は、多くの反感をかってしまいました。そして、私は人前に立つのが怖くなってしまいました。

そんな私が中学二年生のとき、担任の先生に生徒会役員に立候補することをすすめられました。小学校の苦い思い出から、一度は断ろうかと思いましたが、自分の力を伸ばしたいと思い、決心して立候補しました。役員になり、私は一人の先輩に出会いました。その先輩は自分のやりたいことを躊躇せずに実行する人でした。ある時「歴史に残る、生徒会にしたい。」先輩はそう言いました。そんなことができるのでしょうか。私は内心では難しいと思っていました。ところが先輩は、自分の提案を集会で呼びかけ、リーダー会と話し合い、そしてたとえ他の人が協力してくれなくても、一人で実行に移したのです。「すごい、こんなに堂々と自分のやりたいことをする人がいるんだ。」と驚き、私は自分を変えたいという思いが少しずつ強くなっていったのです。そして三年生になり、今度は自分から生徒会に入りました。

さらに思いを強くした私は合唱コンクールでピアノ伴奏に立候補しました。私にとってピアノを弾くことは、大好きなことでしたが伴奏者としてアドバイスをしていくことで、また反感をかうかもしれないと恐れながらの挑戦でした。しかし私の心配をよそに、練習を重ねる中で、たくさんの方が私の考えに賛成してくれたり、中には改善点を加えてくれたりしました。気がつくとは私は、自分の意見を提案することが前ほど怖くなくなっていました。コンクールでは、賞を取ることではできませんでしたが、伴奏をしたからこそ多くの友達と支えあい、

不安な思いと立ち向かえた先の感動を味わうことができました。

七月、ALTの先生のお別れ会を生徒主体で行いました。私は司会を苦手な英語で担当し、大きなプレッシャーを感じながら臨みました。会が終わわり、ALTの先生が言ってくれました。「春風、ありがとう。とても嬉しかった。」そして「ドントビアーフレイド。」と。私の不安な気持ちを察して声をかけてくれたのでしょうか。

今までの私は人の目を気にし、自分の殻を破れず、弱い心と向き合うことができていませんでした。

何かを成し遂げるときは、自分の努力が大切です。そして、その努力の源となるエネルギーは人との出会いから生まれるのではないかと私は思います。自分の心と向き合うきっかけを作ってくれた担任の先生、何事にも前向きに行動する先輩、素直に思いを伝えてくれた友達、そして私の心の奥まで考えてくれたALTの先生。それらの出会いにより、私は弱さと向き合うことができました。今、私は一歩ずつ前に進んでいます。

私の行動は、本当に小さな挑戦かもしれませんが。しかしこの小さな挑戦を続けることが、私を大きく成長させてくれると思っています。「ドントビアーフレイド。」「恐れなくていい。」そのエネルギーをくれた出会いに感謝し、私はこれからも小さな挑戦を積み重ねていきたいと思っています。



百万人。これが何を示しているかわかりますか。——この地球上で、今週生き残ることができないであろう人の数です。

皆さんは、発展途上国と聞いて何を思い浮かべますか。正直私は、こんなにとくさんの人々が亡くなっているとは知りませんでした。五秒に一人が亡くなっている、発展途上国の厳しい現実。実感が沸かないかもしれないですが、例えば日本国内でインフルエンザにより五秒に一人が亡くなる——なんて事態が起これば、国中パニックになりますよね。今まで私はこの現実を、本気で「知ろう」としてこなかったように思います。それを突きつけられたのが、三年生の国際理解講座で配られた写真。それは児童労働の写真でした。そこに写った少女の瞳が、「幸せな地球はつくれないの?」と問いかけているように感じたのです。

私は世界のために何ができるだろう。そう思っていたとき、一つの詩に出会いました。

「世界には六十三億人の人がいますが、もしもそれを百人の村に縮めるとどうなるでしょう」

このような文から始まる『世界がもし百人の村だったら。』その中に、こんな一節があります。

「百人のうち 七十五人は食べ物の蓄えがあり 雨露をしのぐところがあります でも、あとの二十五人はそうではありません 十七人は、きれいで安全な水を飲めません」

例えば日本では、水道をひねるだけで綺麗な水が出ます。トイレやお風呂も何の問題なく使えます。しかしそれは決して当たり前ではありません。村に井戸がなかったり、壊れたりしている場所では、水汲みが子どもたちの仕事です。水汲みのため毎日数十キロ歩かなければならない彼らは、学校に行く時間や遊ぶ時間を奪われています。水の衛生も深刻な課題です。私が最も驚いたことは、細菌で汚染された井戸や池の水で病にかかり、命を落とす人が大勢いることです。綺麗な水を飲む私たちこそ、その大切さを意識し、世界中の人々と分かち

合う必要がある。その事実が胸に染み込んでいくようでした。——確かに、自分のことで精一杯、世界のことなど構ってられない。そんな人が大多数でしょう。しかし、今も地球のどこかに、明日をも生きられるか分からぬ人がいるのです。ある人は不安と、ある人は死の恐怖と、常に隣合わせで。

このような世界のためにまず私達ができることは、「知る」こと、本気で知ろうとすること。私はそう思います。発展途上国の現状をただ「可哀想」だと思うのではなく、その背景にある事柄を見るのです。同じ星に生きる一人の人間として。そして、その上で実際に行動を起こすこと。身近なところでも、私たちにできることがあります。例えば、ペットボトルキャップや書き損じハガキの回収。ワクチンを送るだけでなく、海外の学校の設備を整えることも可能です。また、買物の時も意識してみてください。「フェアトレード」の商品を購入したことはありますか。この商品は、発展途上国で作られたものを公正な価格で継続的に取り引きし、その国の自立を支えることにつながります。皆さんが買ったチョコレートやコーヒーの代金が、生産する人の生活を大いに助けるといえることです。私はフェアトレードの商品に興味を持ち、詳しく調べています。このように、私たち一人一人の行動で、発展途上国の負の連鎖を断ち切ることもできるのです。個人の力は微かでも、多くの人が行動すれば、きっと世界に大きな力をもたらすはずです。同じ地球上に生きる人間として、発展途上国に本気で目を向けてみませんか。



新聞でよく目にする「統合」の文字。私たちの御祓中学校も再来年、他の二つの学校と統合します。生徒数も増え、部活動もさらに活発になることでしょうか。ですが、校舎も「御祓」という学校名もなくなってしまう。母校がなくなってしまうのです。私は、統合してほしくありません。しかし、今ここで私がどうもがいても取り消すことはできません。そこで、先輩方がつくり、積み上げてきた御祓を受け継ぎ、後輩に伝えたいと思っていました。

ちょうどそんな時に、先生から、「日菜子、生徒会役員に立候補してみないか。」と声をかけられました。私は迷いました。せっかくのチャンスだから挑戦してみたいと思う反面、御祓の先頭に立つ一人となり、伝統を受け継ぐのが怖かったです。しかし、周りの友達からの支えもあり、会計を務めました。大きな行事こそなかったものの、スローガンを決めることや、あいさつ運動など自分のできることは精一杯頑張ったつもりです。そして、生徒会役員になってよかったことがありますが、それは、御祓の伝統は中心となる人たちだけで受け継いでいるわけではなく、全校生徒で受け継ぎ、積み上げているということに気が付けたことです。

私には大好きな御祓の伝統があります。生徒のほとんどが帰りぎわ職員室に顔を出してするあいさつです。六年生のときに、職員室の戸を開けて「さようなら。」とあいさつをして帰る生徒の映像を初めて見ました。私は「本当に毎日こんなこと、しているのかな。」と思ったのですが、それは、ゆるぎない事実でした。先輩は、あたりまえのようにあいさつをして帰っていました。最初ははずかしさもあったのですが、三年生が引退する頃には、私たちにとって「さようなら」のあいさつがあたりまえとなり、帰るときは、大きな声で「さようなら。」電話をしている先生がいると「さようなら。」と毎日必ずあいさつをしています。このあいさつを絶対に途絶えさせたくないと思い、今年度入部した一年生には私たちがこれを教え、伝えました。

また、生徒会室にある茶色に日焼けた応援歌の書かれたボード。

三十年以上前に御祓を卒業した父も一緒に歌える「星影清き」や「怒涛」。七鹿陸上競技大会の応援も受け継がれてきた伝統だなど私は思います。昔からの伝統に代々、生徒の工夫が積み上げられ、受け継がれてきているのです。なので、他校の友達から「今年の御祓、すつごく盛り上がりつつたね。」と言われると、応援団ではない私ですが、とてもうれしくなりました。古き伝統を変えていけないからといって受け継いだとはいえません。その時代に応じて新たな色を加えることで、伝統が生き、受け継いだといえるのです。

我が御祓中の幕が閉じるまであと一年と六ヶ月。私たちに何ができるでしょうか。特別なことでなくてもいい、今の自分にもできることがあると思います。

校長先生は私たちに「主体的に。」「自分から。」ということをおっしゃいます。私たちが今まで「習慣」として行ってきたことに「なぜ、大切なんだろう。」と問いかけ、そして答えを探す。私は「あいさつ」にみんながつながるという意義を見い出しました。あの「さようなら。」が七尾中学校の職員室でも響いてほしいのです。みんなで「自分から」問いかける精神が、御祓中学校から七尾中学校へつながることを願い、私は笑顔であいさつをします。





日頃、何気なく生活していく中で、健康のありがたみを感じたことがありますか。毎日健康で過ごせることが、当たり前だと思っっている人が多いのではないのでしょうか。

例えば、風邪をひいて熱が出たら、食欲がなくなったり、体がだるくなったりして、体を休める必要があります。また、手を骨折すると、衣類を着たり脱いだりしにくく、ものをうまく持つこともできなくなるかもしれません。普段、何気なくできていることでも、健康状態が欠けると、日常生活に支障をきたし、人の手を借りる必要が起こってくるのです。

身近でよくある病気や軽いけがだったら、家族の手助けで済みます。でも、それでは済まない場合は、病院に入ることになります。入院すると、生活の場が病院となってしまう。

私の母は、看護師です。だから、家にいないことも多く、とても忙しそうです。みなさんは、看護師の仕事は注射をしたり、検温をしたりするというイメージが強いのではないのでしょうか。私自身も、幼い頃はそういうイメージが強かったのですが、それだけではありません。看護師の仕事の中では、患者さんの日常生活援助が一番大変なのです。それは、排泄、食事、移動、清潔、睡眠など、毎日繰り返される、生きていくために必要なことばかりです。人はそれぞれ違うので、援助の内容や手助けのレベルも違います。それを見極めて、患者さんに関わっていかねばなりません。母は、仕事から帰ってきたら、「今日、一回も座れなかった。」「おむつ交換して腰が痛い。」など、仕事の大変さを話しています。それでも、看護師をやめたいという言葉も、耳にしたことはありません。そして、一日に洗濯機を何度も回したり、私たち、子供のために、大会や習い事の送り迎えをしてくれたり、家族のためにも頑張っている母を見ていて、私もいつの間にか母のようになりたいという気持ちになりました。

中学二年生の職場体験のとき、初めて看護師の仕事を近くで見ました。特に印象に残ったのは、おむつ交換です。汚れたおむつやおしり

を手早くきれいにしていました。母から聞いてはいましたが、実際目の前にして、すごいなあ、母も毎日こんなことをこなしているんだ、と実感しました。そして、患者さんが少しでも気持ちよく生活できるように手助けする、看護師という仕事に就きたいという気持ちがますます増えました。

中学三年生になり、第一回進路希望調査のアンケートが来ました。石川県立田鶴浜高等学校は、病院や福祉施設への就職率が百パーセントということ、総合の時間に調べていたため、ここに行きたいと私は言いました。母は反対しました。母は私に、「一人で生活できるん？今、会えとる人と会えなくなるよ？」と心配そうな顔、声で尋ねました。その言葉で悩んだ私に、今度は「近くの高校でも、専門学校行けば看護師になれるよ。」と教えてくれました。やはり、家族や大事な友達、大切な人と離れるのは寂しいし、辛いことです。そして、たくさん話し合った結果、専門的な技術をすぐに高めるのではなく、人を支えるため、自分が、人間として成長していくことが今の私には大切だと思うようになりました。

看護師になるために、私は今できること一つ一つを順番にしていこうと思います。まず、高校受験で志望校に合格するため、時間を有効に使い、集中して勉強する必要があります。そして、自立して人の心がわかる、思いやりのある人になりたいです。

私は、必ず看護師になります。そして、健康状態が欠けている人や、体が不自由な人、困っている人を助けたいです。今、自分にできることを大切に、たくさん人の役に立てるような看護師になります。





私は日々進歩するために自分に目標を立てて生きています。身長を伸ばそう、課題を提出日までにしよう、人に優しくふるまおう、などではありません。私の目標は、恥を捨てて何事も全力で取り組むことです。このようないたって普通の目標にした理由は、物事をする前に無理だと決めつけている自分がいたからです。

私は、今年の春、応援団副団長という役につきました。応援団副団長という役割は嫌ではなく、むしろやってみたかった役割でした。人の前に立って物事をするのが私は大好きだからです。しかし、リーダーに立つということは予想以上に大変なことでした。自分の思うようにみんながなかなかついてきてくれないのです。私はまず自分が声を出すことに全力をつくしました。たしかに自分から声を出すには勇気がいります。ですが、問いかけられたら誰よりも先に自分から「はい！」と声を出しました。すると遅れながらもみんなが返事を返すようになっていきました。そして応援の声もだんだんできるようになっていきました。この時、私の中で何かがつつ切れました。一人やと恥ずかしい、失敗して笑われたらどうしよう、バカにされたらどうしよう怖い、という気持ちがスーッと消えていったのです。応援団副団長の経験は、私をもっともっと積極的な子に変えてくれました。

去年二月、自分の家の地区で行われる卓球大会がありました。参加してみようと思いい友達を誘いました。しかし当日、その友達が体調不良ででられなくなってしまいました。その時、一人で行っても話す人おらんし、誰も相手にしてくれんやろうなあ、さらに、「何であの子きとるんやろう？」と白い目でみられたら嫌だという不安が私をおそい、私も休もうかと思いました。でもひよっとしたら、これも何かのチャンスなのかもしれないと思い、勇気をだして参加してみることにしました。すると地区の老人の方が「一人で来たん？」と声をかけてくれたり、全然知らない人なのに練習を誘ってくれたり地域の人温かさを感じました。おかげで肩の力も抜け、楽しく参加することができました。そして入賞した私を娘のように「おめでどう」と言ってくれ

る人や「頑張ったね！」とほめてくれる人がいました。

この二つの経験から学んだことが三つあります。一つ目に勇気をだしてみればきつといいことがあるということ。二つ目に恥ずかしがって自分に壁をつくってしまっているはいけないということ。三つ目に積極的に何にでも挑戦すると色々な利益がえられるということです。

一人でも怖くありません。自分を見てくれて、みとめてくれる人がいるのです。一人だけやし、失敗したら恥ずかしいし、といった恥をすてて頑張ることはこれからの自分をどんどん変えていくと思えます。自分づくりには勇気が必要です。自分づくりの勇気をもって、自分から進んで行動し、キラキラとした笑顔で何事にも挑戦していきま





じいちゃんが倒れたと知らされた日の朝は、何も手につきませんでした。

朝六時前、父が寝ている私を起こして、

「じいちゃんが倒れたらしいから、病院行ってくる。すぐに戻ってくるさけ、まだ寝とっていいよ。」

と言い、母を連れて出発してしまいました。

「そんな、寝とっていいよなんてひどい。私も行く。」

と言いつ返したかったけれど、小学生の弟と妹もいるし、病院へ大勢でいくのは迷惑かなと思い直して、家でじつと無事を祈ることにしました。

小さい頃、私はじいちゃんがあまり好きではありませんでした。それは、弟も妹も同じだったと思います。いつも私達をからかい、一日に三本もビールを飲む時もあった、ばあちゃんともよくケンカをしてきたからです。でも、だからこそ、あんなにパワフルなじいちゃんが生死の境をさまよっている状況をあまり信じられなかったのでしょうか。私も弟も妹も、それからあまり眠れずに、結局起きてきてしまいました。

最初は、ただただ無事を願っていましたが、一時間経っても二時間経っても父と母は帰って来ず、「もしかしたらダメだったんじゃないか」ということしか考えられなくなりました。その時、ふと頭に浮かんだのが、「私は今までじいちゃんに何をしてあげてきたか」ということです。毎年さつまいも掘りに誘ってくれた、よく焼きそばを作ってくれた、金魚の飼い方を教えてくれた、お手伝いをした時にはおこづかいをくれた…。たくさんのことを思い出したけれど、それは、じいちゃんが今まで私にしてくれたことばかりでした。

「私はじいちゃんに何かをしてあげたことがあっただろうか。」

そんなことは一つも思い浮かばず、ますます深く後悔して、泣きたくなりました。そして必死で考えました。

「今、私がじいちゃんにできることは……？」

朝の九時くらいになって、父と母が帰ってきました。慌ててじいちゃん具合を聞くと、

「とりあえず麻酔をうって眠っているけど、まだどうなるか分からない。」

と言われました。今私にできることが少しでもあるのなら、早くしたい…。そして、じいちゃんと、今日すいかをとりに行くという約束をしていたのを思い出しました。じいちゃんが帰ってきたときに、すい

かが全部枯れていてがっかりしないように、私は熟したすいかを一人でいくつも収穫しました。

三日後、じいちゃんが目を覚ましたという連絡がありました。じいちゃんは、中学生以上しか入れない集中治療室に寝かされていました。私と父で会いに行った時、じいちゃんの体や顔は、いくつものチューブでつながれていました。動くことはもちろん、話すこともできないじいちゃんと、十分間だけ面会をしました。じいちゃんは「救急車の中で、もうダメだと思った。」と紙に書いて笑いました。私は心から安心して、がんばれと伝えて帰りました。

人はいつ、どうなるかなんて分かりません。私だってもしかしたら、明日病気になるかも知れないし、一時間後に大きなけがをするかも知れません。だから、今日、今、この瞬間を大事にしていきたいし、同時に、周りの人への感謝の気持ちも忘れたくないです。私のわがままで他の人が傷ついて、もしその人が次の日にはいなくなっていたとしたら、私はまた「私はあの人に、何かをしてあげたことがあったか」と考え、何もしていなかったことに気づき、そして後悔するでしょう。そのことはじいちゃんが教えてくれました。ちよつとしたことでも「ありがとう」や「ごめんなさい」が言えるようになれば、後悔することなんてなくなると思うから、私はそんな人を目指したいです。

じいちゃんは今、何事もなかったように、毎日ビールを飲んで、毎日畑でおいしい野菜を育てています。私も帰り道、できるだけじいちゃんとはあちゃんの家に寄るようにしています。

ちよつとだけ、じいちゃんに変化がありました。それは、前よりもがんどではなくなつて、なんだか穏やかになつたことです。じいちゃんにももしかしたら、何か少し後悔が残っていたせいかも知れません。一年前のあの時の話をすると、じいちゃんは必ず、

「俺は、さんずの川を見たんだ。」

とにやにやしながら自慢してきます。そんな話を聞きながら私は、「今」をかみしめるのです。



奨励賞 「生きていられる」ということ

能美市立根上中学校 三年 野口 陽菜



「今、私達は生きている。そのことに感謝して、毎日を通そう。」と、よく小学生の時に、先生に言われた記憶があります。ですが、私はこう思います。私達は今、「生きている」のではなく、「生きていられる」のだと。

私は四月、修学旅行で広島に行きました。平和記念資料館に行った時、写真や映像を見て、自分の知識をはるかにこえる壮絶さに、涙がこみあげてきました。被爆をし、さらに子供にも放射能の被害が続いていることがわかり、とても苦しくなりました。同じ人間であるのにどうしてこんなに差があるんだ、と怒りを覚えたし、「人は皆平等」という言葉に疑問も感じました。その中で私は一枚の写真に衝撃を受けました。それは、原爆の被害にあった方が、生きているかどうか分からなかった自分の家族と、再会した時の写真でした。泣きながら、抱き合って笑っていました。そしてその笑顔は、よく自分が知っている笑顔とは全然違いました。幸せだけでない、決意の笑顔。「もう二度と過ちをおかしてはならない」という、平和を思う笑顔がそこにありました。そのとき私は、自分は「生きていられる」のだと知ったのです。そして同時に、自分がとっていた言動を思い返し、愚かさや恥ずかしさを強く感じました。

「ちょっと、人生に疲れてしまったわあ。」この言葉を、今までに意味もなく、口癖のように使っていました。例えば、自分の苦手な授業があった時や、テストの点数がちよっと下がって落ち込んでいる自分をごまかす時などです。聞く人によつては、自ら命を絶とうとしているように聞こえるかもしれません。今、その局面に戻れるなら思いっきり、私自身に「ふざけるな」と怒鳴ってやりたい気持ちでいっぱいです。この世界には、やりたくもないことを無理やりやらされていたり、戦争で罪もないのに亡くなったりして、今この瞬間にも、悲しみ、苦しんで涙を流している人がたくさんいます。なのに、自由に生きているわたしが、そんな言葉を軽々しく使つてはいけません。と。今日、わたしが疲れたと言つて過ごした一日は、生きたいと願っていたのに生きられなかった人達が、笑顔で生きたかった一日なんだとわかり、心が締め付けられるような思いがしました。

そこで、「平和」について、改めて考えてみました。「平和」を辞書

で調べると、「争いなどがなく、穏やかなこと。安らかなこと。」とできます。ですが私は、「平和」とは「一人一人が生きていられることに感謝し、「生懸命生きよう」としている」という意味だと思っています。ですが、私もみんなも、友達のコンプレックスを笑ったり、LINEで陰口を言うなどして、知らないうちに相手を傷つけているのです。こう考えると、私が毎日過ごしている学校さえも、全く平和ではないと思います。私は、もう今までのように相手を傷つけることは決してしない、と心に誓いました。

以前、部活動内で仲間はすれがおこりそうになりました。だめだと言つたら、逆に私が仲間はすれの対象になるんじゃないかとすごく悩みました。でも、見て見ぬふりはしてはいけません、「相手を傷つけるのはいけないことだよ。相手の気持ちを考えてみて。」と伝えました。するとみんな「確かに陽菜の言う通りやね。」と言ってくれて、仲間はすれの話は消えていきました。この時、いじめにつながるようなことも、少しの勇気で止められるんだ。身近な平和を創れるんだと実感しました。

辛そうな人がいたら一言声をかける、相手を傷つけることを言わない。私も言葉を言う前に、相手を傷つけないかを考えるようになりました。行動に出すことで、平和への第一歩が踏み出せると思います。広島に行ったことで、「生きていられる」ということや、「命の尊さ」に気づき、身近な平和について考えることができました。

最近、いじめや心のすれ違いにより死に繋がってしまうニュースがよく流れています。しかし、私のように「少しの思いやりと勇気で変えられることがある」ということに気づく人が増え、行動する人が増えれば、必ず「平和」と呼ぶことができる時が訪れます。私と同じ思いを持っている人はいませんか。一歩踏み出して、たくさんの人に広げていきませんか。

私は、まず身近な「平和」、いじめのない学校を創つていこうと思います。





それは去年の夏のことでした。

「防災士の試験に申し込んでおいたぞ。」突然父が僕にそう言うのです。「防災士？」僕はとまどいました。

防災士とは、災害対策の知識や、災害発生時に緊急に対応する技能を持った人のことです。

父は、災害時に必要な知識を身につけてほしいとの願いから、申し込んだのでしょう。父の思いは僕にもわかります。「災害」と聞くと僕の脳裏にもあのときの光景が浮かんでくるからです。

平成十九年三月、能登半島地震発生。死者一名、倒壊家屋多数。僕達の住む門前町も震度六強という非常に強いゆれに襲われました。僕は六才で、そのときは弟と部屋で遊んでいたのですが、ゴオオオという音とともにものすごいゆれがきて、部屋は本やら棚やらが散乱し、壁には亀裂、一瞬にしてさんたんたる変わり様でした。父と母がすぐに駆けつけ避難、外では倒壊した家やがれきの山、それを虚ろな目で見つめる近所の人——その様子を目の当たりにし、おびえていたのを覚えています。

そのときのすさまじい記憶がよみがえり、「よし、今なら自分も何かできるかもしれない」と受験勉強することになりました。勉強すると、気象情報に出てくる注意報は、「災害がおこるおそれがある」という意味であることや、能登半島地震のとき、本当はすぐに山へ避難すべきであったことなど、様々なことがわかりました。

また、学んだことを試す機会もありました。学校の防災教室での避難所運営ゲームです。実際の避難所を想定し、病気の人、介護が必要な人など多くの避難者とそれに伴うたくさん課題に対応します。誰を入口の近くにおくか、掲示板はどこに設置するかなどは、勉強した知識を生かすことができましたが、避難者の多さにはお手上げでした。現実問題として、十分な収容先の準備が必要だと感じました。

僕なりに防災について学んだ中で、絶対に皆さんに実行してほしいと思うことが二つあります。

一つ目は、地震に備えて家具の配置を考え直し、耐震補強することです。寝室や出口の付近にものを置かず、すぐに逃げられるようにしておいて下さい。家具をとめがねなどで耐震補強することも、大切です。というのは、阪神淡路大震災のときに亡くなった方は、主に家屋の倒壊や家具の下敷きによる窒息死が原因となっていたからです。法律の耐震基準は確かに厳しく安全になりましたが、家が無事でも、逃げ道が断たれてしまった場合は元も子もありません。

二つ目は、地震が収まってからどのような行動を取るべきなのかを家族で考えておくことです。地震後はすぐ、とにかく高い所に避難して下さい。

津波は、百メートルを十秒で駆け抜ける速さで到達するため、すぐに逃げないと間に合いません。東日本大震災のときもそうでしたが、津波はすべてを完膚なきまでにたたきのめし、多くの命を奪います。しかし、津波が到達しなかったところは全くの無傷で済むのです。

「備えあれば憂いなし」皆さん普段から万全の準備をし、災害時には第一に命を守る行動を取って下さい。自分の命を守ることで、他の人の命を生かすことができます。

僕も、防災のことをいつも気にとめながら、自分やみんなの命を守るように行動していきたいと思います。





皆さんは、「友達」と聞いて何を思い浮かべますか。仲良くおしゃべりをしたり、一緒に登下校したり、と楽しいことばかりではないでしょうか。しかし、私は「友達」について深刻に考えてしまいました。なぜなら、私自身が「いじめ」に出会ってしまったからです。

なんでもないある日、それは起こりました。親しかった友達に、悪口を言われはじめたのです。「うざいよね」「みんな嫌いやよね。」最初はそのような声が聞こえても、自分のことじゃないと思っていました。でも、私のことだったので。原因は、私が体育の予定を聞き忘れたことでした。私はすぐに謝りました。しかし「無責任すぎませんか?」「ちゃんと謝れや。」彼女たちは何度も私に言いました。その言葉を聞いた瞬間、私は背筋が凍り、指先まで冷たくなりました。卒業式の曲の練習の時は、「優希、声出してたくない?」「あ、それ思っただろ。」と責められました。声が小さかったのは確かですが、もう私はどうすれば良いのか分からなくなり、号泣してしまいました。

ある日、その子達が「謝らん?」と話しているのが聞こえました。「あ、やっと辛かったのが終わる!」そう感じて少し心が軽くなった瞬間、次に聞こえてきた彼女達の言葉に失望しました。「だって、さすがに家庭連絡とかいったらやばくない?」結局、自分のことが大切だったのです。

「ウザい」「死ぬ」いつも遠回しに私を傷つける言葉。私がそこにいないかのようにふるまう態度。そんなことから、私はただうつつむいて一人ぼっちでいるようになりました。あの時にされたこと、言われたこと、信じていた友達に見放されたショックと悲しみは、ずいぶんたった今でも忘れられません。私はこれをきっかけに何事にも自信がなくなり、声が小さくなりました。人と会うのがこわくなり、外出をあまりしなくなりました。そして一番つらいのは、私が私らしくなくなってきたことです。

私はもともと、悪く言えばうるさいくらいにぎやかで明るかったそうです。それに比べて今は、自分でもわかるくらい暗くて、ネガティブで、よく人から自虐的と言われます。自分を変えるきっかけをなくしたままずっとこの状態なので、私は本当の自分分からなくなっ

きました。でも、私は今の自分が好きではありません。元に戻りたいのです。

最近、そんな私の前に、私を変えてくれる一人の子が現れました。初めは「友達」というほど親しい仲ではなかったのですが、いつの間にか、その子はずっと私の傍にいて、守ってくれるようになっていました。私が泣きそうな顔をしていると、すぐに気づいて笑わせてくれたり、私が笑うと、次は、「ゆっきー笑いのつば浅すぎ!。」と言ってふざけたり……。彼女という時間が幸せでした。そしてその子は、私の唯一の甘えられる大きな存在になっていきました。彼女が傍にいて、私に安心して、少し強くなることができました。彼女に感謝しています。

そのいじめは先生方の対応により終わりを迎えました。彼女たちとすれ違うとき、ドクンッとはしますが、今は大丈夫です。なぜなら、大切な「友達」が私にはいるからです。

友達とは何でしょう。私は、相手の気持ちをどこまでくみとってあげられるかだと考えます。他人は結果でしか判断してくれませんが、友達は、相手の結果にまでかかった努力を評価してくれる存在だと思います。私が友達だと思っていた子は、残念だけれど他人でした。そして今、私を守ってくれるその子こそ友達なのです。

自分のことを守ってくれる「友達」をつくりたい。自分自身が誰かを守る「友達」になりたい。たとえ「友達」でなかったとしても、誰かが困っていたら助けてあげられる、そんな関係をつくっていききたい。皆さんもそう思いませんか。

もし今、つらい状況にある人がいたら、信じて下さい。自分の努力を認めてくれる友達が必ずどこかにいることを。だから、のりこえて下さい。あなたは絶対に、一人ぼっちではありません。





「おかえり。」

この言葉は普通、家族の中で使われます。ですが、家族以外の人にこの言葉をかけてもらった、そんな経験をしたことはありませんか。

私の住んでいる町は田舎で、今まで田舎ならではのことをたくさん経験してきました。田舎といえは、不慣れなイメージがあると思います。確かに、電車に乗り遅れば、一時間ほど待たないといけないこともあるし、飲み物の自動販売機を探すのにも一苦労です。こんなことは、都会ではないと思います。私にとって都会のイメージは便利で、田舎とは真逆です。ですが、私が住む地域にあるのは人と人とがつながれる、あたたかさです。

その、つながりの源となっているのがあいさつだと思っています。私は時と場合によりますが、基本的には地域で会った人にはあいさつをしています。朝、隣の家のおじいちゃんに「おはようございます。」という、「いってらっしゃい。」が返ってきて、夕方、学校帰り、畑仕事をしているおばあちゃんに「こんにちは。」という「おかえり。」が返ってくる。これはまれなことではありません。「ただいま。」と返していいのかわいさも迷いますが、私も相手も笑顔になっています。不思議なことですが、これが日常なのです。私も、改めて考えてみないと不思議だと思えませんでした。なぜ、家族以外の他人に、「いってらっしゃい。」や「おかえり。」と言うのか。私は昔から他の人を家族のように気遣っていたからではないかと思いました。子どものとき、地域の人に「おかえり。」と言ってもらっていた人が、大きくなって同じことをする、そうやって今につながっていったのではないのでしょうか。私も大きくなったら、こんな風に、地域の子どもたちに、このあたたかさを伝えていけたらいいと思います。

何気ないあいさつに心がホッとあたたかくなったという他にも、地域のひととの関わりを通して、つい、笑顔になったという経験もあります。

みなさんは、「おおかみこどもの雨と雪」という映画を見たことが

ありますか。この映画の主人公は田舎に引っ越します。そこで、あたたかい経験をたくさんするのですが、その中で、育てた作物をその人たちと交換し合うというシーンがあります。これは、私の住んでいる地域でも、ごく当たり前に行われています。

しかし、私がすごいと思っているのは、野菜などを何も言わずにおいでいくというところです。私の祖母の家で実際にあって、びっくりしました。そして、祖母も誰が置いて行ってくれたのかが分かっているのです。そんなことを田舎の人たちは何も疑わずに行っているのはすごいことだと思いました。それは、やはり信頼関係があるからだと思います。こんなふうに、家族以外にも信じられる人がいるのは、心強くていいなと思いました。

この他にもおばあちゃんがすごいことを思い知らされることがありました。これは、よく姉が話すことです。姉は祖母と二人で出掛けて、祖母は隣のおばさんと少し話をしていたらいいです。姉が「友達？」と尋ねると、祖母は「ううん。全然知らん人や。」と答えたと言っていました。この町の人たち全員が家族のようにあたたかい、これはすごいことであり、守っていくべきことだと思いました。

うすい長方形の板で簡単に情報を交換できる今だからこそ、私たちには人との直接のつながりや人の温かさが必要であり、大切にすべきことなのではないでしょうか。もし、学校帰りの学生たちにあいさつされたら、ぜひ言ってみてください。

「おかえり。」と。
きつと心があたたかくなると思います。





みなさんは二〇一一年三月十一日に起きた東日本大震災を覚えていますか。この震災で約二十万人の尊い命が奪われました。私がこれから話すのは、震災が起きた時の話ではなく、震災が起きた後の話です。

東日本大震災が起きた時、私は小学校四年生でした。学校から帰って一息つこうとリビングに入った時、ふとテレビの画面が目に入り、衝撃的な映像を目の当たりにしました。それは、津波が街を襲い、いろいろな建物を喰らい、飲みこんでいる情景でした。私が初めて津波の恐ろしさを知った映像でした。今までにない恐怖を感じました。

そんな衝撃的な映像を見てから三年後、私は中国の上海に住んでいました。私の転校した上海日本人学校では、少しでも被災地の人達を支援したいと思い、生徒会が千羽鶴を折って届けようという企画を考えました。約千五百人の生徒が鶴を一生懸命折りました。その結果、千羽鶴ではなく、万羽鶴になりました。万羽鶴の束は二つあり、両方とも代表者によって無事に被災地の仙台の小学校に届けられました。私はその時、被災地の人達のために何かできたと思いい、満足した気持ちに浸っていました。被災地の人達もきつと喜んでくれると信じていました。しかしその気持ちは、ただの自己満足だったのです。

万羽鶴を届けてから数週間後。私はテレビを見ていました。その内容は、被災地に届けられた、いろいろな救援物資の話でした。私はドキッとしました。なぜなら、一番届けてもらって困る物として千羽鶴や手紙などが入っていたからです。理由はとても簡単でした。ただ被災地で生活する上で置き場所に困り、一生懸命生活している被災地の人達にとって必要がないからです。かと言って、「気持ちがかもった千羽鶴や手紙を粗末にすることはできない。」と被災地の人は語っていました。

私はこの時気づきました。私達は相手が今おかれている状況を考えてもせず、自分達だけの思いで行動していたのです。私達はこうしたら喜んでくれるだろうという勝手な解釈で、相手がどう思うかも自分達に都合の良いように考えていたのです。被災地の人達が求めていたも

のは、生活に必要な物資でした。私達は気持ちを届けることはできたけど、逆に、その気持ちが被災地の人達を困らせていたのです。

私はこの出来事から人の気持ちを考えて行動することの大切さを学びました。気持ちがあつてしたんだからいいんじゃない？と思う人もいるかもしれませんが、受け取ってどう思うかは相手なのです。

例えば、試合で負けて帰ってきた友だちに「大丈夫だよ、次は勝てるよ。」と言うより、何も言わず優しく見守ってあげの方が良い時もあります。相手を助きたい、力になりたいと思うとき、自分だけの解釈で行動するのではなく、相手の気持ちや状況を一番に考えたいと思いました。そして、相手にとって一番求められる「本当の心からの支援」ができるようになりたいと思います。





私が成長するためには、良い集団であることが必要でした。これは、私が一年半の部活動で学んだことです。私は陸上部に所属しています。一年時の活動は、胸を張れるものではありませんでした。練習メニューがないのも当たり前、みんなの目標や意識もバラバラで、試合に行けば他校の先生に注意されていました。このような状況に陸上部の先輩も私たち一年生もこのままではいけないという気持ちを抱えていました。しかし、私たちは何をすればいいかも分からず、陸上競技から逃げ、楽な方へ楽な方へと走っていました。大会でも私は、これまで負けることのなかった友だちに負けました。友だちの喜ぶ姿を間近で見て、胸がしめつけられるような思いでした。

そんな一年間を過ごした私たちのもとに、二人の先生がやってきました。先生方は、私たちに二つのことを言いました。一つは、真剣に陸上競技と向き合うこと、もう一つは、全員の目標として陸上部を清泉中の部活にする、とのことでした。私は、先生の言葉に疑いを持ちながらも「もう負けたくない」その一心で練習しました。練習は、以前にもまして厳しいものになりました。しかし、陸上部には、これまでなかった活気と勢いがありました。それは、真剣に陸上競技と向き合い、全員が一つの目標に向かい始めたからだと思います。迎えた秋の新人戦。私は個人二種目で優勝。そして四継でも優勝することができました。私だけではなく、多くの部員が入賞を果たしました。

このような結果を残すことができたのは、逃げずに練習と向き合うようになったからです。苦の先に成長があると信じ、自ら苦の方へと向かうようになりました。それは、だれよりも速く走るためです。逃げていた自分自身と向き合うことで、私たち陸上部は、良い集団となることができましたと思います。

では、良い集団の力とは何でしょう。私は、みんなが目標を一つにし、それに向かって努力するときに生まれる力だと思っています。この力を持った集団こそが、良い集団になれるのです。

なかには、陸上は個人競技だから集団で取り組む必要はないと思う

人もいるかもしれませんが。しかし、清泉中陸上部のようなかけ出しの部活が市や県で戦うためには、一人の力では足りません。集団の力が必要です。厳しい練習の中、隣を見れば一緒に歯を食いしばっている仲間がいたから、乗り越えられた練習もありました。今年の県大会では、目標としていた全国中学校陸上競技大会の出場権を獲得しました。目標を見失いそうになったときも、先輩、先生、友だち、たくさんの人が私を応援してくれました。一人ではできなかったことです。私たちは、部員一丸となって走ってきました。早く走るため、遠くへ跳ぶため、遠くへ投げるため。目的は違っても目標は一つです。

良い集団になることで、自分が成長していけるということを私は経験しました。これは陸上競技だけではなく、人として成長するためにも大切なことだと思います。もし、また同じような状況になっても、私はこの経験から学んだことを生かし、自分一人ではなく良い集団の一員として立ち向かっていこうと思います。





皆さんは加賀丸いもをご存知ですか。加賀丸いもは、すりおろして「とろろ」として食べると粘りが強く、もちもちした食感でとても美味いのです。

私は演劇が好きです。ある日の新聞記事で「演劇オーディション」があることを知り、能美市総合文化会館でオーディションを受け合格しました。劇団名は「南加賀」と書いて「南加賀いい座」です。南加賀は丸いもが採れる能美市のほか、小松市、加賀市、川北町からなる地域のことです。

その劇は「ぶんぶん屋」という丸いも食堂を舞台に、悪い不動産会社から店を守るために、みんなで力を合わせるお話です。この劇は、皆さんに加賀丸いもをPRしようと生まれたものでした。初めは丸いものことより演技の方が大切で、興味がありませんでした。しかし、劇の台詞で丸いもの歴史について語る場面があるので、自分が丸いものことについて勉強し詳しくなり、皆さんに伝えたくくなりました。

加賀丸いもには、能美市で栽培が始まって長い歴史があります。旧根上町に丸いもがやってきたのは大正時代です。沢田氏と秋田氏が、三重から持ち帰った伊勢芋を栽培したことが始まりでした。昭和九年、手取川の氾濫により田んぼに大量の水と川砂が流れ込み育てていた米が作れなくなりました。その後、その場所で芋作りを始めると、丸みのある「丸いも」が多く採れるようになったらしいのです。なぜか全国各地で作っても、別の土地では丸く大きくならないそうです。さらに、丸いもは一つの株に一つしかできないことや、栽培するのに十三年か月もかかることを知りました。そのことから私は、加賀丸いもが、私の生まれ育ったこの能美市でしか取れない貴重な宝物だと思いました。

また、一緒に劇をした農家さんは、アメリカへ留学して農業のことを学んで来たくらい、丸いもに強い愛情をもっていました。それだけ丸いもを愛し、未来につなげたいという思いに私も共感しました。

そんなすばらしい能美市の宝、加賀丸いもですが、年々生産農家の

高齢化や減少が進み、今後の継続が難しくなっているということも知りました。そこで私は、もっと多くの人に加賀丸いもの存在や大切さを知ってほしいと思い、演劇の練習にもよりいっそう力が入りました。

今年の一月十八日の劇本番で、丸いもにはたくさんさんのビタミンが入っていることや、どのようにして食べたなら美味しいか、生産農家さんが高齢化していることなど、笑いを交え分かりやすく団員全員で伝えることができました。

一つの新聞記事から始まって、演劇を通して丸いもについて知り、私にできることは何か?と考えるようになりました。農家さんが長い期間大切に育てた愛情たっぷりの加賀丸いもを、これから先も「南加賀いい座」を続け、広めていきたいです。そして、この意見発表の場で一人でも多くの人に加賀丸いもを知ってもらい、百年、千年先までアピールすることを考えました。将来は、丸いも農家さんが増えてほしいです。これからも、毎日の食卓に丸いもが並び、家族みんなが笑顔で楽しく過ごせる日々が続いてほしいと私は願っています。



皆さんが成人して社会で活躍するころには、人口の減少やグローバル化の進展、そして絶え間ない技術革新により、社会が大きく変化すると言われています。そして、皆さんが就くことになるであろう職業についても、大きく変化しているのではないかと、たとえば、今ある職業がなくなっているとか、半分ほどが新しいものになっているのではないかと、こういことが言われています。大きく変わっていく時代に、皆さんには、こうした変化を乗り越えて、高い志や意欲を持つ自立した人間として未来を切り開いていく力が求められることとなります。

こうした中、皆さんが今回のように日常の出来事や社会の出来事から自ら関心を持って、自ら課題を見つけ、そしてその解決方法を考え、自分なりの結論を導き出していることは大変素晴らしいことだと思えますし、それを、こういう形で主張・表現することは、これから求められる力として、大変必要なことだと思います。

また、今日の発表の内容に関しても、日常の生活の中にある何気ないことを改めて見つめ直して見ることもか、ある出来事をきっかけに新しく少し考えてみることもか、いずれも自分の身の回りから見つけたテーマを取り上げていました。たとえば、次のような内容がありました。

- ・「将来の目標をしっかりと持ち自ら成長しよう」「周りに左右されることなく努力を積み重ねていこう」という、自分自身を磨き高めていこうとする内容
- ・「目標に向けて心を一つにしてみんなで努力しよう」「友達のことや人を思いやることを大切にしよう」という、人と人との関わりの中でよりよく生きようとする内容
- ・「人との出会いを通して小さな挑戦を積み重ねていこう」「後悔しないように今この時を大事にしよう」という、命や出会いを大切に

てたくましく生きていこうとする内容

- ・「世界に目を向け共に生きるためにできることを実行しよう」「本当に相手のことを思いやるということをしつかり考え行動しよう」という、よりよい社会や生活の実現に向けて行動しようとする内容

それらを皆さん自身の視点や言葉で、しかも自分のメッセージが聴く人の心に届くように伝え方を工夫して、実感を持って語っており、皆さんが物事をどのようにとらえ考えているのかということが、本当によく伝わってきたと思います。

これからはこの少年の主張での貴重な経験を生かして、自らの言動に自信を持って、また責任を持って活躍するとともに、さらに高い志を持って、それぞれの夢や希望の実現に向けて歩むことを期待していきます。

この大会に参加した皆さんはもちろんのこと、ご支援いただいた先生方やご家族の方、さらにはこの大会の開催に尽力いただいた関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

平成27年度 少年の主張石川県大会概要

1 趣 旨

中学生が、日常生活での体験や考えを自分自身の言葉でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、中学生世代の社会参加意識の醸成を図るとともに、多くの大人に現代の中学生への理解を深めてもらう。

2 主 催

石川県 石川県教育委員会 石川県健民運動推進本部

3 後 援

石川県市町教育委員会連合会 石川県小中学校長会
石川県PTA連合会 石川県少年団体協議会
明るい社会づくり運動いしかわ 石川県青少年育成アドバイザー協会
石川県BBS連盟

4 日 時

平成27年9月26日（土）午後1時30分～

5 会 場

石川県青少年総合研修センター（金沢市常盤町212-1 TEL076-252-0666）

6 出場資格

県大会へ出場する生徒は各地区大会で選出された生徒とし、在籍中学校長へは健民運動推進本部より県大会参加通知をする。

7 発表内容（日本語で発表すること）

（1）次に掲げる事項の中で、日頃考えていることや感じていることについて、自由な発想で飾り気ない自分自身の言葉でまとめる。

ア 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など

イ 家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど

ウ テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や提言など

（2）発表時間は、一人当たり5分程度とする。

8 表 彰

最優秀賞（石川県知事賞） 1名

優 秀 賞（石川県教育委員会賞） 2名

奨 励 賞（石川県健民運動推進本部長賞） 13名

9 その他

（1）発表内容は、記録集として発表者、中学校長、青少年団体等へ配付する。また、広く同世代の少年及び世代を越えた人々の意識を啓発するために、県ホームページにも掲載する。

（2）最優秀賞受賞生徒は、独立行政法人国立青少年教育振興機構が11月に開催する「少年の主張全国大会」出場者選考のための全国大会代表審査委員会へ推薦される。

県大会審査基準

1 採点方法

100点満点とし、各項目の配点は次のとおりとする。

- (1) 論旨・内容 60点
- (2) 表現力 30点
- (3) 態度 10点

2 採点上の観点

(1) 論旨・内容について

- ア 少年らしく新鮮で意欲的な主張であるか
- イ 主張の内容が明確で、論旨が一貫しているか
- ウ 主張の内容が共感と感動を与えるか

(2) 表現力について

- ア 聞きやすいか
- イ 話しぶりに熱意と迫力があるか
- ウ 聴衆に共感と感動を与えるか

(3) 態度について

- ア 中学生らしく、さわやかで落ち着いた態度であるか

3 時間超過の場合の減点

各発表者の持時間を5分とし、持時間を超過した場合はその時間の長さに応じて減点をする。(5分30秒以内は減点しない。5分30秒を超え6分以内は1点、6分を超えると2点の減点をする。)

審 査 委 員

(1) 審査委員長 井 上 克 彦 (石川県市町教育委員会連合会 副会長)

(2) 審査委員 下 出 博 明 (石川県青少年育成推進指導員連絡会 会長)

東 友起子 (石川県PTA連合会 副会長)

牧 野 哲 栄 (石川県少年団体協議会 副会長)

永 田 靖 人 (石川県小中学校長会 理事)

才 鷹 一 博 (石川県教育委員会事務局学校指導課 担当課長)

地区大会概要

(1) 加賀地区大会（加賀市、小松市、能美市、能美郡川北町）

「第34回 加賀地区中学生意見発表大会」

主催：加賀地区市町教育委員会

共催：石川県健民運動推進本部

日時：平成27年8月29日（土）13：30～

会場：能美市根上総合文化会館

審査委員：高橋 正英（石川県小松教育事務所長）

石黒 和彦（加南地区教育委員会連絡協議会長）

中嶋 敏一（能美市教育長）

竹本 明彦（能美市学校教育研究会長）

本多 他家志（能美市立図書館長）

発表者（15名）

演題	中学校名	学年	氏名
友達の力	加賀市立錦城中学校	3	新井 千紘
がんばる意味	能美市立辰口中学校	3	山崎 竜士
「生きていられる」ということ	能美市立根上中学校	3	野口 陽菜
私	川北町立川北中学校	3	野 朱里
偏見が隠す優しさ	加賀市立山代中学校	3	阿慈地 りさ
考えて動く	能美市立寺井中学校	3	塩村 来太
今、わたしにできること	能美市立辰口中学校	3	小杉 和奏
立ち向かう	加賀市立山代中学校	3	山井 壮真
私の体験	加賀市立山中中学校	3	河畑 璃子
努力する意味	川北町立川北中学校	3	平野 祥
人とのつながり、あたたかさ	加賀市立東和中学校	3	北市 佳於里
未来へつなげる!!加賀丸いも!!	能美市立根上中学校	2	越田 瑞生
友達の優しさから気づいたこと	小松市立芦城中学校	2	竹島 綾里
上手でなくても	加賀市立片山津中学校	3	潮津 ひなた
おかげ様の心	能美市立寺井中学校	2	有生 光

(2) 石川中央地区大会 (かほく市、白山市、野々市市、河北郡)

「第25回 (平成27年度) 少年の主張石川中央地区大会」

主催 石川県 石川県健民運動推進本部

共催 津幡町教育委員会 石川県青少年育成アドバイザー協会

日時 平成27年8月30日 (日) 13:30～

会場 津幡町文化会館シグナス

審査委員 早川 尚之 (津幡町教育委員会 教育長)

野川 徹 (河北郡市校長会 会長)

作本 秀樹 (白山市PTA連合会 副会長)

菅田 峰行 (石川県金沢教育事務所 指導主事)

竹本 京子 (石川県青少年育成アドバイザー協会 監事)

発表者 (20名)

タイトル	中学校名	学年	氏名
がんばらなくていい	白山市立笠間中学校	3	上田 裕衣
後悔	白山市立笠間中学校	3	中西 海斗
和食の魅力	白山市立北星中学校	3	橋本 未由希
思いやり	白山市立光野中学校	3	荒井 大雄
母	白山市立光野中学校	3	岡田 悠人
祖父の右手	白山市立鶴来中学校	3	小田 あゆみ
未来へつなぐ	白山市立北辰中学校	3	田原 桃子
受験生	白山市立鳥越中学校	3	山本 さくら
大人への一歩	白山市立白嶺中学校	3	加藤 友里
努力の証	野々市市立野々市中学校	3	本谷 桃子
これからの自分のために	野々市市立布水中学校	3	大畑 ヒカル
一人ぼっちの人なんていない	野々市市立布水中学校	3	押田 優希
言葉だけでなく	かほく市立宇ノ気中学校	3	木村 友里乃
今を大切に	かほく市立宇ノ気中学校	3	宮谷 翠
私の大切な人	かほく市立河北台中学校	3	氣谷 理帆
心の支援	かほく市立高松中学校	3	中村 日奈子
なくならない児童虐待	内灘町立内灘中学校	3	安藤 栞菜
私が目指す人間	内灘町立内灘中学校	3	宮村 碧
私が目指す国際交流	津幡町立津幡中学校	2	上谷 奏
いじめをへらすための私の考え	津幡町立津幡南中学校	3	中村 優衣

(3) 金沢市地区大会（金沢市）

第68回金沢市「中学生からのメッセージ」発表会

主催 金沢市教育委員会 金沢市中学校文化連盟弁論部

日時 平成27年8月30日（日）9:00～

会場 金沢市教育プラザ富樫

審査委員 二見 和男 NHKキャスター

市内中学校国語科担当教諭

発表者（26名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
本当に「がんばる」とは	金沢市立金石中学校	3	林 加奈子
走るために	金沢市立清泉中学校	3	日吉 美智
発展途上国と共に	金沢市立泉中学校	3	八尾 佳凜
小さな挑戦	県立金沢錦丘中学校	3	米澤 春風
コミュニケーションは自分から	金沢市立高尾台中学校	3	寒河江香野子
あなたらしさを大切に	金沢市立紫錦台中学校	3	本江 優姫
いじめとの距離感	金沢市立大徳中学校	3	中嶋 和
昔と今の差別	金沢市立鳴和中学校	3	宋 眞賀
自分が変われば苦手は直る	金沢市立城南中学校	3	谷島 里奈
曾祖父の想い	金沢市立芝原中学校	3	牧 環那
努力は本当に裏切らないのか？	金沢市立森本中学校	3	中野 日菜子
一生分の一瞬	金沢市立高岡中学校	2	藤井 菜緒
日本に生まれた私たちの使命	金沢市立額中学校	3	藤井 莉子
みんなのとうちゃん	金沢市立小将町中学校	3	團野 七星
「あたりまえ」をありがとう	金沢大学附属中学校	3	田中 麻里子
光が希望である世界をめざして	北陸学院中学校	3	吉田 美佳子
戦後70年に思うこと	金沢市立長田中学校	3	今村 優梨
伝えて分かりあえること	金沢市立犀生中学校	3	定池 朋子
私の夢	金沢市立医王山中学校	1	園田 楓
ネットと私たち	金沢市立西南部中学校	3	竹下 悦
言葉を受けとめる	金沢市立緑中学校	3	安田 遥
諦めないということ	金沢市立浅野川中学校	3	石丸 瑤子
夢や希望をもつこと	金沢市立港中学校	3	丹羽 可奈恵
住みやすい場所、内川。	金沢市立内川中学校	3	小高 裕貴
看護師をめざして～今できることを大切に～	金沢市立北鳴中学校	3	石橋 紗希
命を重くみるということ	金沢市立野田中学校	3	瀧野 沙希

(4) 能登地区大会（七尾市、羽咋市、輪島市、珠洲市、羽咋郡、鹿島郡、鳳珠郡）

「第47回全能登私の主張発表大会」

主催 第47回全能登私の主張発表大会実行委員会、七尾市教育委員会

共催 石川県健民運動推進本部

日時 平成27年8月23日（日） 9:00～

会場 能登演劇堂

審査委員 松浦 颯雄（全国高等学校文化連盟弁論部常任理事）

荒巻 幸子（石川県中能登教育事務所指導課長）

藤澤 浩（七尾市教育委員会学校教育課長）

鳥居 貞利（七尾市公民館連絡協議会副会長）

佐原加津美（七尾市小中学校校長会代表）

発表者（11名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
感謝の伝え方	七尾市立朝日中学校	3	石黒 亜友美
私の15センチものさし	七尾市立中島中学校	3	永谷 紅芽
日菜乃の誕生	七尾市立田鶴浜中学校	3	端 拓也
今、一番近くの人	七尾市立能登香島中学校	3	田中 風歌
備えあれば憂いなし	輪島市立門前中学校	3	小川 泰平
尊さ	七尾市立御祓中学校	3	浦谷 有唯
生きることの意味	中能登町立中能登中学校	3	延田 結美
自分づくり	七尾市立朝日中学校	3	高田 沙雪
努力のレンガ	中能登町立中能登中学校	3	山田 萌恵
繋ぐ	七尾市立御祓中学校	3	山本 日菜子
人生という名の舞台上で輝くために	七尾市立七尾東部中学校	3	崎出 愛夢

語る思いと聞く思い

広島県 広島市立国泰寺中学校 二年 藤井 志穂

「被爆者の高齢化が進む今、十代は経験を聴ける最後の世代です。私たちは記憶を次世代へ残していかなくはなりません。」そう書きかけた原稿を私はぐしゃぐしゃにして捨てました。私はジュニアライターという、被爆体験を聞いて記事や感想を書く活動をしています。私は何度か取材をする内に、この活動が苦しくなっていました。

特に残っていることがあります。それまで穏やかに取材を受けていたその人は、ふいに優しい表情を崩しました。長い沈黙の後、一言。「おかあさん」と呟いてから引きつったように笑いました。でも目は笑っていませんでした。それから人が変わったように喋り始めました。グロテスクな話も心痛い話も質問を入れるスキもない位に。

取材が終わって、じわじわと恐怖が湧いてきました。話し始めと沈黙の後との表情のギャップ。それは私が家族の被爆状況を聞いた時に起こった事なのです。あの人は隠したい所に私が触らないように、笑顔で牽制していたのではないか、私はそれを無視し一番深い傷に触れたのではないか。

私は被爆者への取材を避けるようになりました。もうこれ以上被爆者の方を苦しめたくない。苦しめてまで聞く事にどんな意味があるのか。活動に対する疑問で一杯でした。

ある日、取材の人数不足で呼ばれ久々に私は被爆体験を聞く事になりました。話し手をAさんとします。Aさんはなぜか妹さんの事だけ話しませんでした。「妹さんはどうなったんですか。」Aさんから表情が消えました。

「妹は死にました。全身焼けて。水を、と言われたけれど垂れた皮膚が口を塞いでいて飲ませてあげられなかったんです。」

苦しげな表情に私は声をあげました。

「ごめんなさい！ もう話さなくていいです。」

「謝らないで。私なんのために話しているか分かりますか？ この苦しみを残すためです。あの地獄を思い出すと吐きそうな程悲しくなります。私はあの頃、死にたかった。友達も家族もいなくなつて。で

もその先の人生を歩む内に、死んだ皆の幸せも叶えるために生きていくのだと思うようになりました。でも私の人生だけでは足りないです。そのために私ができるのは、辛い経験をもう他の人にさせない事。あなた達の未来を守りたい。どうか、忘れないで。」

圧倒されました。そして恥ずかしくなりました。「苦しんでも話す」という決意に今まで私は気付けなかったのです。語る側の熱い思いに對し、「苦しめているのでは」という聞く側の心配はなんてちっぽけだったのでしょうか。

家に帰った私は、投げ捨てていた原稿を広げ書き直しました。「私は記憶と共に、その記憶に刻み込まれた一つ一つの苦しい経験と反戦への強い思いを引き継いでいかなくはなりません。」

私は聞きます。被爆者の全ての思いを真正面から受け止めて。そして伝えます。一つ一つの思いが読み手の心に届くように、全力で。



毎月第3日曜日は「家庭の日」です
家族とのふれあいを大切にしましょう

石川県健民運動推進本部

〒920-8580 石川県金沢市鞍月1丁目1番地
石川県県民文化局県民交流課内

TEL 076-225-1365 FAX 076-225-1363

ホームページ [健民運動](#) [検索](#)

メール kouryu@pref.ishikawa.lg.jp

この冊子は再生紙を使用しています